

明星大学蔵 奈良絵本『新曲』釈文

柴田雅生*

表紙 上下冊とも改装された表紙は新調草花模様の綴子織。
料紙 金泥で施された草花の下絵あり。
外題・内題・奥書ともになし。
本文字高 約二三糎。

上冊 二四丁、下冊 二〇丁。每半丁各一〇行（備考二参照）。
挿絵 合計十三図。

上冊 片面七図（三ウ・八オ・一二オ・一五オ・一七ウ・二〇オ・二三オ）

下冊 片面五図（六ウ・一一ウ・一四オ・一七ウ・一九ウ）
見開き一図（二ウ・三オ）

奈良絵本『新曲』は、『太平記』巻一八「一条御息所の事」に基づく幸若舞の詞章を美麗な絵本に仕立てたものである。『新曲』という名称は「舞の本」三十六番のなかでもっとも新しい曲という意味で名付けられたものであるが、他の曲に比しても奈良絵本（絵巻を含む）としての伝本はさほど多くないという。

ここに翻字するのは、本学青梅校図書館に所蔵される奈良絵本『新曲』の全文である。原態を尊重しつつも読みやすさを優先し、釈文として掲載することとした。また挿絵は釈文の末尾にまとめて白黒で掲載した。

書誌

体裁 大本二冊。縦二九・六糎、横二二・二糎。袋綴改装。江戸時代前期の写本と見られる。

※以下本文の順に従って、上冊・下冊とする。

備考一 石川透氏の分類（石川透「奈良絵本・絵巻の制作」『奈良絵本・絵巻の生成』（三弥井書店、二〇〇三年八月））に従えば、縦型特大型に属する。

備考二 本文中に和歌が三首記されているが、上五ウのみ二字下げて二行に組んでいる。他は本文に続けて記される。

また、挿絵を配置するため、挿絵の直前に散らし書きの半葉があり、上冊の過半数（三オ・七ウ・一一ウ・二二ウ）は行数が一〇行となるよう調整されている。一方、上一七オ・上一九ウ・下二オ・下一九オは八行、下六オ・下一一オは九行、下一三ウは六行、下一七オは七行と必ずしも一定しない。なお、挿絵四の直前（上一四ウ）にはこのような調整の跡は見られない。

上下冊の末尾も行数の調整をはかったのか、八行目の途中から行を変えて九行に仕立てている。

誤写と思われる部分はさほど見られない。上二オ4行末の「ゝ」

および上九才9行の「す」には濁点が付されているものの、本文の筆とは異なるか。本文の校異については別稿を用意している。

備考三 挿絵は土佐派の流れを汲む絵師の筆になると思われる。背景や着物の模様といった細部までを精密に描き、霞には金箔を散らす。

凡例

一 表紙・見返し・遊紙などは一行空欄を原則とする。ただし、挿絵がある場合には、() 内にその旨を記載した。

二 改行は原本に従う。半丁ごとに「印」を付して、その下の() 内に、丁数及びオ・ウの省略符号を付記する。ただし、表紙・見返し・前遊紙の場合は、その旨を「印下の() 内に記載し、丁数には含めない。

三 本文は可能な限り原本に忠実に翻字し、不審の箇所があっても、みだりにこれを改めることはしなかった。不審の箇所については、(ママ) を右傍に付した。

四 翻字は、現行の文字字体に翻刻することを基本としたが、「恠」「國」「嶋」などの旧字体等の異体字を残したところがある。変体仮名については「ハ」「ツ」の字体を残した。

五 「見」「氣」などの、漢字か仮名か判別しにくいものについては、字義に即した使い方の場合に限り漢字として翻字した。

六 繰り返し符号(踊り字)は、「ゝ・ゞ」「く・ぐ」(くの字点)「々」を用いた。「ゝ(二の字点)」は用いず、「々」で代用した。

七 原文には濁点や句読点、振り仮名・振り漢字等などは一箇所を除き(書誌・備考二参照)付されていない。翻字に際しては、便宜的に、

句読点・濁点・会話部分などを示す鉤括弧などを加えた。また、仮名が連続して文脈が読み取りにくい場合には、振り漢字を() に入れて加えた。

釈文

上冊

(外題なし)

「(表紙)

(白紙)

「(見返し)

(白紙)

「(前遊紙オ)

(白紙)

「(前遊紙ウ)

つら／＼おもん見るに、いにしへよりいまに
いたるまで、てうてきをほろぼし、四かいを太
(平)へいにいたす事、ぶりやくのこうにしくハなし。
されバ、きんだいハ(異國)(襲来)
もなく、(帝位)にいるにあらそふかたもましまさ
ず。しかしながら、うんの天めい(元弘)にかなハせ
たまふによつてなり。こゝにげん(建)こう、けん
むのむかしをおもふに、せんぢやう(戦場)にしてか

バねをさらすのみならず、あるひ(君臣)はくしん(義)のぎをまもつて、身(著海)をさうかいのなみにしづめ、あるひ(妹背)ハいもせのわかれをかなしみて、おもひを(古郷)こきやうの月になしむる。中にもあハれなりしハ、一の宮のみやすどころの御事と、(右衛門)ゑもん(府生)のふしやう、はだのたけぶん(秦)がふるまひなり。そのころ、みやすでに(武文)うるかふりめして、しんきやうの中に人となり(初)たまひしかバ、御さい(才)かくもいみじく、よう(容顔)がんと世にすぐれましませバ、さだめて(東宮)とうぐうにたゝせ給ひなんと、人みなときめきあへりけるに、おもひのほかに(関)くわんと(東)うの御はからひとして、かの二条のゐんの御子、(東宮)とうぐうにたゝせ給ひたれば、こなたへまいりつかへし人々ハ、みなのぞみをうしなひ、みやも、よの中よろづにつけて、たゞうちしほれ、あけくれハ、しいかに心をそへ、(風月)ふうげつにおもひをそへさせ給ふ。しかりといへども、おりに(折)つけたる御あそびなどありしかど、さしてけうぜさせ給ふこともなく、いかなるみやばら、いち人の御むすめなりとも、かくとおほせ出されバ、御こゝろをつくさせたまふまでの御事あらじとおぼしめす御心にそまざりければ、これをおぼしめしたる御けしきもなく、たゞひ

「(一才)」

「(一ウ)」

「(二才)」

とりのみ、とし月をおくらせ給ひけるとかや。あるとき、(関白)くわんぱくけにて、なまかん(生上達部)だちめあつまりて、(絵合)ゑあハせの有けるに、(洞)とう院のさ大しやうどのゝ出されたるゑに、(源氏)げんじ(優婆塞)のむばそくのみやの御むすめ、はしらに(雲隠)かくりて、びはをひきたまふに、くもがくれたる月の、にハかにいとあかくさし出たれば、「あふぎなうても、まねきつべかりけり」とて、(撥)ばちをあげ、さしのぞきたるかほつき、いみじくらうたげにてにはやかなるけしき、いふばかりもなくふでをつくしてぞかきたりける。みや、これをつくぐと御らんじて、かぎりなく御心にかゝりければ、此ゑをしバしめしをかれ、「見るになぐさむかたもや」と、まき返し(御らんじ)くれども、御心さらになぐさまざりけり。

(挿絵一)

「(三才)」

「(三ウ)」

「むかし、(李夫人)りふじん、(甘泉殿)かんせんでんのゆかにふし、はかなくならせ給ひしを、(皇帝)くわうてい、かなしみたえずして、(反魂香)はんこんかうをたかれしに、(李夫人)りふじんのおもかげかすかに見えしを、(似)せゑにうつつして御らんぜしに、「ものいはず、

わらはず、^(武帝)ぶていのなげき給ひしもことハ

りかな」と、今さらにおもひぞしらせたまひける。「我ながら、はかなの心のまよひやな。ま

ことにいろを見てだにも、世ハみな夢のう

つゝとこそおもひすつべきなるに、こハ何

のあだし心ぞや。^(花山)くわさんのそうじやうへん

ぜうを、^(照)つらつきハ、「哥のさまハえたれども、

まことすくなし。たとへバ、^(絵)ゑにかける女をみて、

いたづらに心をなやますごとし」と、^(古今)こきんの

じよにもかきたりし、そのたぐひにもなり

ぬるものよ」と、おもひすてさせ給へども、いや

ましの御心、むねにみちてぞおハしける。去バ、

かたへのいふことなる人を御らんじて、御

めをだにもかけられず。まして、^(時)ときぐのた

よりにことゝ^(言問)ひかハされし御かたさまへハ、

一むらさめのあまやどりにもたちよらせ給ふ

べき御心づかひもなし。せめて世の中にさる

人ありときこしめし、御心にかゝらバ、玉すだれ

のひまもとむるかぜのたよりもありぬべし。

また、わづかに人をみしばかりなる御こゝろ

あてならバ、水のあハのきえかへりても、よる

せハなどかなかるべき。見しにもあらず、きゝし

にもなく、むかしがたりのあだなるふでのあ

とに御心をつくして、「いかにせん」と、こひか

「(五才)

「(四才)

「(四ウ)

ける。せめて御心をやるかたもやと、御くるま

にめされ、^(賀茂)かもたゝすのみやにまふでさせ

たまひ、^(御手洗)みたらし川にて御てうづめされ、何と

なくかハにせうよふさせさせ給ひ、むかし、^(業)なり

ひらこひせじと御そぎせしことのあはれ

なるやうにおほしめしいで、

いのるとも神やハうけんかげをだに

^(御手洗)みたらし川のおきおもひを

と、かやうにうちゑいじたまふ。^(時)ときしも、^(村)むら

しぐれのすぎゆくほど、^(木)このしたつゆに立

ぬれて、御袖もいとどほしあへず。「日も、はや暮

ぬ」と申こゑに、御くるまをとどろかして、一条

をすぎさせ給ふに、たがすむやどゝハしらね

ども、^(籬)かきに^(音)こけむし、^(瓦)かハらの衾もとしふり

て、^(住)すみあらしたるやどなれば、物さびしげ

なるそのうちに、^(聲)ばちをとけだかく、^(音)せいがい

はをぞひきける。「あやしや、たれなるらん」と

おぼしめし、すぎがてに御くるまをとどめ、はる

かに見入させたまふに、見る人有ともしらず

して、^(有明)ありあけの月のくもまよりほのく

とさし出たるに、^(御簾)みすたかくまきあげ、いとあ

てやかなる女バうの、^(琵琶)びはをだんずるにてぞ

ありける。^(珊瑚)せつさんこをくなく^(曲)りやうきよ

く。^(水)こほりぎよく^(玉)ばんにおッせんばんせい。

かきみだしたるそのこゑハ、にハのおちばに

「(六才)

「(五ウ)

まがひつゝ、よそにハふらぬむらさめに、御袖
 もしほるばかりなり。「あやしや」とおぼしめし
 て、みや、御めもあやにつらく御らんぜらるゝ
 に、このほどそゝろに御心をつくして、「ゆめに
 もせめて見バヤ」と、こひかなしませたまひし
 にせゑにすこしもたがはず、なをあてやかな
 るかたち、いはんかたなくぞ見えたりける。御
 心そらにあくがれて、たど／＼しきほどなりし
 かバ、つきやまのこかげにたちやすらハせた
 まふに、女、「見る人ありけり」とて、ひはをバき
 ちやうのかたはらにさしをき、うちへまぎれ
 いりにけり。ひくやもすもあからさまな
 るおもかげに、「又たちいづることもや」と、夜ふ
 くるまでたちやすらハせたまへバ、あやし
 げなる御しよさぶらひの、みかうしおろす
 をとして、

夜もふけ、はや人みな

しづまり

ければ、

かくても

あるべきならねバ、

(還) みやも
(御) くわんぎよ

なりに

けり。

「(六ウ)」

「(七オ)」

「(七ウ)」

(挿絵二)

ゑにかきたりしかたちだに、御心をなや
 まされし御ことなれば、まして、まことのいろ
 を御らんじて、「いかにせん」と、かなしませ給ふ
 もことハりなり。その後よりハ、たゞひたすら
 なる御けしきにみえながら、さすが御ことの
 葉にもいだされず。つねに御くわいに参りし
 二条のちうじやうためふゆ、「いつぞや、かもの
 たゞすの御かへさの、ほのかなりしよひのま
 の月、またも御らんぜまほしくおぼしめす
 にや。その御ことにて候ハゞ、やすきほどの御事
 にて候。此女バうのゆくゑをくハしくたづね候
 へバ、いまで川のさ大じんさんあきこうがむ
 すめにて候を、とくだいじのさ大しやうに申
 なづけながら、いまだくわうたいごうぐうのみ
 くしげにて候なり。セツにおぼしめされば、
 哥の御くわいにことよせて、かのていへいらせ
 たまひ、たまだれのひまも、みづから御こゝろを
 あらハす御事にても御らんぜよかし」と申
 せバ、みや、れいならず御心とけ、うちゑませた
 まひて、「さらバこんや、かのていにて、ほうへん
 の御くわいあるべき」よしを、さ大じんのかたへ
 おほせつかハされければ、きんあきこう、「か

「(八オ)」

「(八ウ)」

「(九オ)」

たじけなし」と、とりきらめき、^(数奇)すきの人あまたまねきよせ、あんない申せバ、ためふゆのあそんばかりを御ともにて、かのていへいらせたまひけり。うたの事ハ、こんや、さまでの御^(本意)ほんるならねバ、ひかうバかりにて、ほうへんハなし。あるじのおとど、御かへらけもちて参りたれバ、みや、つねよりもけうぜさせたまひ、^(鄂曲絃歌)えいきよくけんかのたえゝに、御さかづきをたバせたるに、あるじもいたくゑひふしぬ。さて、みやも御まくらをかたぶけさせたまへバ、はや人みなしづまりて、夜すでにふけにけり。中だちのさちうじやうハ、心ありてよハ^(左中將)ざりけり。かれにあんないせさせ、此女バうのすみけるに^(西對)のたいへ忍びいらせ給ひ、かひまみえたまへバ、ともしびのかげかすかなるに、はなもみぢちりみだれたるびやうぶにを^(屏風)きもせず、ねもせぬさましほれふし、たゞいま、人々のよみたりしうたのたんざくとりあげて、かほうちかたぶけたれバ、こぼれかりたるひたいのかみの、にほやかにほのかなるかほバせ、露をふくめるはなのあけぼの、風にしたがへる柳の夕べのいろ、ゑにかくともふでもをよびがたし。かたるにこと葉もなかるべし。「よそながらほのかにみゆるかたちの、よにたぐひもやあらんずらんと、あやしき

「(九ウ)

「(一〇オ)

までにおもひしが、なをかずならず」おぼしめさるゝほどなり。はや、ほれゝとなつて、「しらず、わがたましるも、その袖のうちに入ぬるやらん」と、おぼしめさるゝほどなり。おりふし、あたりにもなく、ともし火さへかすかなる^(妻戸)に、つまどをすこしあけ、うちへいらせ給ふに、女、おどろくかほにもあらず、のどやかにもてなし、きぬひきかづき、うちふしたるけハひ、いひしらずなえやかなり。みやも、かたへらにふし給ひて、ありしながらの御心づくし、あはれなるまでにきこえけれども、とかくいらへも申さず、たゞおもひしほれたるそのけしき、まことに匂ひかうバしく、はなかほり、月かすむよの手まくらに、みはてぬ夢の御心まよひ、あくるもしらず、うちかたらハせたまへども、なをつれなきけしきにて、つゆ^(声)ほどもなびかぬさまなるにや、八こゑの鳥もつげわたり、なみだのなかにとけやらぬ。をのがきぬゝひやゝかに、たぐひもつらきありあけの

「(一〇ウ)

「(一一オ)

つれなきかげに

たちかへらせたまひ

けり。

(挿絵三)

「(一二ウ)

「(一二才)

それよりして、たび／＼の御せうそくありて、いふばかりもなく御ふみのかずハ、はや千づかにもなりぬるやらんとおぼゆるほどになりければ、女もあはれるかたに心ひかれて、のぼれなくだるいなふねの、いなべおぼゆるけしきになんあらはれたり。されども、人めを中のせきもりにて、月ごろすぎさせ給ひけり。あるとき、しきふのせうひでふさといふじゆしやをめして、じゃうぐわんせいよふをよませできこしめされしに、「むかし、たうのたいそうくわうてい、しんかむすめをかうゐにそなへて、げんくわでんにかしづきいれんとしたまふを、ぎてう、いさめて申やう、(魏徴)「この女ハ、すでにりくしにやくせり」とそうし申たりければ、たいそう、そのいさめにしたがつて、きうちうにめさるゝことをやめ給ひき」とだんじけり。みや、これをつくゝときこしめし、「いかなれば、このきみハ、けんじんのいさめにつきて、いろこのむ心をすてたまひけるハ。いかなるいはれなれば、すでに人にいひなづけて、事さだまりたる中をさけて、人の心をやぶるべきか」と、むかしのたとへをはぢ、よのそしりをおぼしめして、それよりして御心のうちにハこひかなしませ給

「(一二ウ)

「(二三才)

へども、さすが御こと葉にハ出されず、御文さへかきたへたれば、女も、「もゝよのしぢのはしがきも、いまハわれやかずるゝまして、」うちわびて、あまのかるもにおもひみだれて、月日をぞをくらせたまひける。とくだいじ、此よしきこしめし、「みやのさやうにおぼしめしたらんを、いかでびんなうなることのあるべきか」と、はやあらんかたへかよふみちありときこしめし、みやも、いまハ御はゞかりもなくして御ふみをつかハさる。いつよりも、くろみすぎて、『しらせばやしほやくうらのけぶりだに思ハぬかぜになびくならひを』と。女も、あまりつれなかりしことを、「われながらつらき心かな」と、おもひかへすほどになりしかば、こと葉ハなくて、『たちぬべきうきなをかねておもはずはかぜにけぶりのなびかざらめや』と。その後よりハ、かなたこなたへむすぼゝれし心のしたひもうちとけて、さよのまくらを(川島)かハしまの、水の心もあさからん御なかとならせ給ひけり。「いきてかいろうのちぎりふかく、しゝてハどうけツのこけのしたにも」とおぼしめしかハし給ふ。いまだひとゝせにもたらずして、てんかのらんいできて、一のみやハとさのはたへながされさせ給へバ、みやすどころハ、ひとりみやよにとゞまらせ

「(二三ウ)

「(二四才)

給ひて、あけくれなげきしづませたまふ。

「(一四ウ)

(挿絵四)

せめてなき世のわかれなりせば、うきにたえぬハ命にて、むまれあはんずる後の世のちぎりをもたのむべきが、これハ又おなじよながら、うみ山をへだて、たがひにかぜのたよりのをとづれをだにもきかせたまはず、としごろめしつかへしせいし、くわんぢよ一人もまいりかよはず、よろづむかしにかはりたるよとこそならせたまひけれ。すみあらしたるよもぎふのやどのつゆけきに、御袖のかはくひまもなく、おもひくずをれ給ひて、「いかで、なみだのたまのをも、ながらぬらん」と、あやしきほどにぞおぼしめす。みやみやこを御出より、君のわかれ、御身のうへ、ひとかたならぬ御なげき、みやすどころの御なごり、今をかぎりとおぼしめし、「道の草葉の露しもときえはつるとも、おしからじ」と、おぼしめさるゝ御いのちのながらへて、つれなく、とさのはたといふところの、あさましげなるはにふのこや、此世のうちとも思はれぬうらのあたりにうつされて、月日をくりたまへバ、はるゝまもなき御

「(一五オ)

「(一五ウ)

「(一六オ)

なげき、たとへんかたもましまさず、思ひくづをれたまひしを、御いたはしくやおもひけん、御けいごに候ひしかるのしやうじ、なさけありてすゝめ申けるやうハ、「なにかはくるしかるべき。みやすどころをしのびやかに、これへくだしまいらせて、御ころをもたがひに御なぐさみ候へ」とて、いろいろ御きぬ一かさねてうしん申て、そのほかにみちのほどのよういまで、ねんごろにさたしけれバ、みやハよろこびおぼしめし、たゞ一人めしつかはれける

「(一六ウ)

(奏) (武文)
はだのたけぶん

を

御むかひ

にぞ

のぼせ

ける。

「(一七オ)

(挿絵五)

(武文) 御ふみ給はりて、いそぎみやこへのぼりしに、いくほどなきに、御ざどころ、見しにもあらずあれはてゝ、むぐらしげりてかどをとぢ、姿の葉つもりてみちもなく、おとづれかハすものとてハ、ふるきこずゑの

「(一七ウ)

夕あらし、のきもる月のかげならでハ、すむ人もなくあれはてたり。「さてはいづくにか

たち忍バせたまひぬらん」と、かなたこなたと

御ゆくゑをたづねけるほどに、さがのおく

なる山ざとに、まつのでがきひまあらハ

なる、つたはひかり、いけのすがたももの

さびしきみぎハの奈かせ、あきすさまじく

ふきしほり、たれすみぬらんと見る物

うげなるやどのうちに、びはをだんずる

をとしけり。「あやしや」とたちどまり、これを

きけバ、まがふべくもあらぬみやすどころの

御(撥音)ばちをとなり。たけぶん(武文)、うれしく思ひ、か

きのやぶれよりうちへいり、ゑんのまへに

かしこまりたれば、やぶれたるみすのうち

よりも、はるかに見出させたまひ、なにと仰

出さるゝ御こと葉なく、「あれや」とばかりの御

こゑかすかに聞えながら、女バうたち、さゝめ

きあひて、まづなくこゑのみぞきこえける。

たけぶん(武文)、「みやの御つかひにまかりのぼりて

候」と申もあへず、ゑんに手うちかけて、さめ

くゝとぞなきにける。やゝありて、「たゞこれ

まで」とめさるれば、みすのまへにひざまづ

き、「くもゐのほかと思ひやりまいらするも、

あまりせんかたもなき御事にて候へバ、い

かにもして、ゐなかへ御くだり候へ」との御

「(一八才)

むかひに

まかり

のぼり

て候」と、

御ふみ

を

さゝげ

ければ、

「(一九才)

(挿絵六)

「(二〇才)

いそぎひらひて御らんぜらるゝに、げにも

おもひのセツなるいろ、さぞとおぼえて、こ

との葉ごとにをく露の、御袖にあまるばかり

なり。「よしや、いかなるひなのすまひなりとも、

そのうきにこそたえめ」とて、やがて御かどで

ありければ、たけぶん(武文)、かひくしく、御こしなど

たづねいだし、まづあまがさきまでくだし

まいらせて、とかいのじゆんぶうをぞあひまち

ける。かゝりけるところに、つくし人になつら

の五郎といひける(武士)、京よりるなかへくだ

りけるが、これもおなじうらにかぜをまちて

ゐたりしが、みやすどころの御すがたをかき

のやぶれよりみたれば、「こハ、そも天人のこの

どへあまくだれるか。此世の人とおぼえず」

「(二〇才)

「(一九才)

と、めがれもせずまぼりゐたりしが、「あな、あぢきなや。たとひぬしある人なりとも、又いかなる女(院)ん、ひめみやにてもおハせよかし。一夜のほどのちぎりにもとせのいのちに

かへん事、なにかおしからん。うバひとりてくだらバや」とおもふところに、たけぶん(武文)がしも

べの、はまへいでゝあそびけるを、よびよせて、さけをのませて、ひきで物とらせ、「さて、御(刃)へんがしう(主)のぐそくしたてまつる上らうハ、

いかなる人ぞ」といひければ、げらうのものゝかなしハ、さけにふけり、ひき出物にめで、このやうありのまゝにぞかたりける。まつら、お

ほきによるこびて、「けふ、このころハ、いかなるみやにてもおハせよかし。むほん(謀叛)のくみにてながされさせ給ふ人のところへ、しのふでく

だり給へる上らうを、みちにてうバひとりたらんは、さしたる(罪科)ざいくわハあるまじき」とおもひければ、らうどうどもにやどのあんな

い見せをかせ、日のくるゝをぞあひまちける。夜、すでにふけゝれば、まつらがらうどう(松浦)三十三

四人、ものゝ具ひしゝとさしかため、たいまつ(松明)に火をかけ、しとみ、やりどをけやぶりて、ぜん(前後)ごよりうツてぞ入にける。はだ(泰)のたけ

ぶん(武)ハ、京のものとハいひながら、ひごろ手がらをあらハして、人にすぐるゝものなれば、

「(二二才)

「がうだう入たる」と心えて、まくらにたてたる(強盗)たちおツとり、ちうもん(中門)さしてきツている、すゝむかたきを三人、てのしたにてきりふせ、のこるかたきを大庭へ一どにばツとをひいだし、大を(音)んあげてな(右衛門)のやうハ、「うゑもん(府生)のふしやう、はだ(泰)のたけぶん(武文)といふ大かうのもの、こゝにあり。とられぬものをとらんとて、二

なき命をうしなふものゝふびん(不便)さよ」と、もツたるたちをおしなをし、

もんのわきにぞ立たり

ける。

「(二二ウ)

(挿絵七)

まつら(松浦)がらうどうども、たけぶん(武文)ひとりにきりたてられ、もんのそとへひきたりしが、

「きたなし。かたきハ一人ぞ。かへせゝ」といふま

まに、そバなる家に火をかけて、おめきさけむではせたりける。たけぶん(武文)、心ハたけゝれども、けぶりをかせにふきかけられ、かなふべきやう

あらざれば、うちへはしりかへツて、みやす所をおひ(負)まいらせ、むかふかたきをうちらはらひ、

みなとのふねをまねきつゝ、「いかなる舟にて候とも、此上らうをしばらくのせてたべ」とよ

バツて、なみうちぎハにぞたツたりける。舟

「(二三ウ)

どものその中に、^(運)うんのきハめのかなしさ
 ハ、まつらがふねにこれをき、一ばんになぎ
^(松浦)さにさしよせたり。たけぶん、^(武文)なのめによる
 こびて、屋かたのうちにのせ申、御ともの
 人々をふねにのせんとおもひて、はしりか
 へツて見れば、火かゝりて、わがたづぬる
 人々ハ、ゆきがたしらずぞ

なりにける。

(白紙)

「(二四才)

「(二四ウ)

「(裏見返し)

「(裏表紙)

下冊

(外題なし)

「(表紙)

「(見返し)

(白紙)

「(前遊紙才)

(白紙)

「(前遊紙ウ)

そのひまに、^(松浦)まつらハ、「我ふねにめされたる
 ことハ、ひとへに天のあたふるところなり。
 いそぎふねにのれや」とて、家の子郎^(等)どう
 百余人、とるものもとあへず、みなふねに
 こそのツたりけれ。ともづなとひてをし
 いだす。たけぶん、^(武文)なぎさにかへツて、「舟ハ」
 と、へバ、なかりけり。見ればおきにふねぞ
^(浮)うかみたり。「なふ、そのふね、よせ候へ。屋かた
 のうちにのせ申上らうをあげ申さん」と、
 こゑをハかりによバ、れども、^(順風)じゆんぶう
 にほをあげ、れバ、ふねハ^(次第)しだひにへだ
 りぬ。たけぶん、^(武文)あまりのむねんさに、^(無念)あま
^(舟)をふねにうちのツて、身づからろをおして
^(追風)いそげども、おひてもえたる大ふねに、お
 ツつくべきやうもあらざれば、あふぎを
 あげて、「そのふねとまれ」^(松浦)とまねきけ
 る。まつらがふねにこれをき、どツとわ
 らふこゑしけり。たけぶん、^(武文)「やすからぬも
 のかな。そのぎにてあるならバ、たゞいま、^(龍神)かい
 ていのりうじんとなツて、そのふねにお
 ひてハやるまじき物を」といかツて、ふね
^(船板)のへいたにつツたちあがり、
 はら十もんじに
 かききツて、

「(一才)

「(一ウ)

(蒼海)
さうかいの

そこにぞ

入に

ける。

「(二才)

(挿絵八・右)

「(二ウ)

(挿絵八・左)

「(三才)

みやすどころハ、よひのまの夜うちのいり
(肝)

たるさハぎより、きも心も御身にそハず、
(夢浮橋)

ゆめうきはしをうきしづみ、ふちせをたど
(淵瀬)

るこちして、「なにとなりゆくことやらん」と、

なきふしてこそおハしけれ。ふねの内なる
(主)

ものどもが、「あッばれ、大かうのものかな。しう
(武文)

の上らうを人にうバれ、はらをきりつる
(沙汰)

ことよ」などゝさたするを、「たけぶんがこと
(武文)

やらん」ときこしめしながら、そなたをだにも
(武文)

みやらせたまはず、きぬひきかづきて、やかた
(武文)

のうちにふししづみてましますところ、
(鹿)

見るもおそろしきむくつけなるひけお
(男)

とこの、こゑいとなまりて、いろのあくまで
(男)

くろきが、御そばにまいり、「なにをかさして
(男)

むつからせたまふぞ。おもしろき道すがら、

「(三ウ)

(名所) (浦)
めいしよく、うらくを御らんじて、御なぐさみ
(酔)

候へ。さやうにてハ、いかなるものも舟にゑう
(酔)

ものにて候」と、とかくなくさめ申せども、御
(酔)

かほをもたげさせたまはず。たゞ、おにを
(酔)

一しよにのせられ、舟三かうにさほをさ
(酔)

じも、これにハすぎじとおぼえ、むくつけ
(酔)

おとこもばうぜんとして、ふなバたにより
(酔)

かゝり、これさへあきればてたるていなり。
(酔)

その夜ハ、大もツのうらにいかりをおろし、
(酔)

よをうらかぜにたゞよひあけられバ、「かぜ
(酔)

よくなりぬ」とて、おなじとまりの舟ども、
(酔)

ほをひき、かぢとり、をのがさまくこぎゆけバ、
(酔)

みやこハ、はやあとのかすみとへだりぬ。
(酔)

「九國へハ、いつかつかん」と、人の申をきこしめし、
(酔)

「さてハ、心つくしへゆくたびなり」と、御心ほ
(酔)

そきにつけても、「北野天神のあら人がみと
(酔)

ならせたまひし、そのいにしへ御心づくし
(酔)

を今もおぼしめしわすれさせ給はずハ、我を
(酔)

みやこへかへしたまへ」と、御心のうちにいの
(酔)

りたまふ。その日のくれほどに、あはのなる
(酔)

とをすぎけるに、いそかぜかハリ、しほむかひ、
(酔)

此ふねさらにゆきやらす。舟人おどろき、ほ
(酔)

をついて、ちかきうらによせんとすれば、お
(酔)

きつしをあひに、大のあらなみきて、ふね
(酔)

をかいいていしづめんとす。すいしゆ、かんどり
(酔)

「(四才)

「(四ウ)

「(五才)

「いかゞハせん」とあはて、^(簾)むしろ、^(苦)とまをなげ
入て、うづにまかせて、そのひまにこぎとを

さんとしけれども、ふねかつてはたらかず。

^(渦)うずのまふにしたがつて、なみとともにめ

ぐるこことハ、^(茶)ちやうすをおすよりもすみや

かなり。「これハ、いかさま、りうじんの^(財)さいほう

にめをかけなやますとおぼえたり。なにを

もうみに入よ」とて、^(鎧)よろひ、^(腹)はらまき、^(太刀)たち、か

たな、かずをつくして入れれども、うずのまふ

事なをやまず。「もしも、いろあひ、^(装)しやう

ぞくにや、めを入てもあるらん」とて、みやす所

のきぬとあかきはかまを入れれば、しらなみ

いろへんじて、くれなるをひたすごとく也。

これにうづハしづまりけれども、舟ハおなじ

所に三日三夜ぞめぐりける。舟中の人々

一人もおきあがらず、みなふなぞこにひれ

ふして

^(前後)ぜんごもしらずぞなり

にける。

「(五ウ)

「(六オ)

「(六ウ)

(挿絵九)

みやすどころハ、さらでだにいきたる御心も
なきうへに、此なみのさハぎにて御心もよハ
り、今ハ、や人心ちもまします。「よしや、いき

てうきめを見んよりハ、いかならんふちせにも
御身をしづめバヤ」とおぼしめしけれども、さ

すがに、今をかぎりときけぶこゑをきこし

めせバ、「^(尊)千いろのそのみくづとなり、ふか

きつみにしづみなん後の世を、たれかハし

りてとぶらふべき。あさましさよ」と、おぼし

めす御心のうちこそ、あハれなれ。まつらも

今をかぎりとなつて、「かゝるやんごとなき人

をとりたてまつたりしゆへにこそ、かやう

にりうじんの^(龍神)とがめもありけるか」と、「せん

なきわざ／＼をしつるものかな」と、まことに

こうくわいのけしきなり。かゝるところに、ふ

なぞこよりもかんどり一人はひ出て申ける

は、「^(鳴門)此なると、申ハ、^(龍宮)りうぐうのとうもん

あたりたるところにて候へバ、なにゝてもり

うじんのほしがらせたまふものを、うみへし

づめたまハねバ、いつもふしぎのあるところ

にて候なり。これハ、いかさま屋かたのうちに

めされたる上らうを、りうじんおもひかけ申

されたとぞんじ候。申もなか／＼^(邪見)じゃけん

になさけなく候へども、此御事一人ゆへ、そく

ばく^(不便)のものがなさけなくしせんこと、

ふびんに候へバ、此上らうをりうじんへたて

まつり、しづめたまへ。百余人のいのちを御

たすけあれ」と申。まつら、^(松浦)もとよりなさけ

「(七オ)

「(七ウ)

なきいなこうどのことなれば、「もしわが命や

たすかる」とおもひ、屋かたのうちへまいり、
みやすどころをあらゝかにひきおこし申、

「つらきけしきまいらするもほいなく候

へバ、うみへしづめまいらすべきにて候。御

ふかくハ、とさのはたへながれよせたまひ、

みやとやらん、だうとやらんと、ひとツうらに

すませたまへ」と、あらゝかにかきいだきたて

まつり、うみにしづめんとす。これほどの御

事になりて、なにの御こと葉のあるべき

なれば、はや／＼御こゑもいささず。御こゝろの

うちにハ、ほとけの御名ばかりとなへて、たえ

いらせたまひぬ。これをみて、御そうの一にん

びんせんしたりけるが、まつらがたもとに

すがり、「いかなる御事にて候ぞ。りうじんと

申ハなんばうむくせかいのじやうだうをと

げて、ほとけのじゆきをえたる物にて候へバ、

まつたくざいごうのたむけをうくべからず」

と、「たゞきやうをよみ、だらにをみてゝ、りう

じんぼうらくにそなへんこそ、しんじツの

きたうともなるべく候へ」と申ければ、まつら

もさすがいは木ならねバ、みやすどころを

ふなぞこへあらゝかになげつけ申、「さらば、

そうのきにつきてきたうをせよ」とて、せん

ちうの人々、どうをんにくわんをんのみやう

「(八才)

「(八ウ)

「(九才)

がうをとなへしに、ふしぎなるものども、かい

じやうにかびいでゝぞ見えにける。まづ一

ばん、大こうのじちやうがながびツをかい

てとをるとみえて、うちよせぬ。そのつぎを

見てあれば、あしげのこまにしろくらをき、

八人のとねりいでとをるとみえてうちよせ

ぬ。やゝしバラくありて、大もツのうらにて

はらきツてしゝたりしはだのたけぶん、ひ

おどしのよろひきて、五まいかぶとのをしめ、

つきげなる馬にのり、ゆんづえにすがりて、

みなぐれなるのあふぎをあげ、まつらが舟

にむかひて、「とまれ／＼」とまねひて、なみの

そこにぞ入にける。かんどりどもが、是をみて、

「なだをはしるふねに、ふしぎのみゆるハ、つね

のことに候へども、これハ、いかさまたけぶん

がをんりやうとこそぞんじ候へ。そのしる

しを御らんぜんとおぼしめさバ、せうせん一

そうひきおろし、水主を一人あひそへ、この

上らうをのせまいらせ、なみのうへにつき

ながして、御らんぜよ」と申。「此ぎ、もツとも

しかるべし」とて、せうせん一そう引おろし、

すいしゆ一人とみやすどころをのせまいらせ、

さばかりうづまきかへすなみのうへへぞ、う

かべける。かのさうり、そくりが、かいがんに

はなたれて、きかんのうれいにしづみしも、

「(九ウ)

「(一〇才)

それハ人すむ嶋なれば、たちよるかたも有
ぬべし。これハ、うらでもしまでもなく、いかで
なるとのなみのうへ、身をすてふねのうき
しづみ、

しほせにめぐる

水のあへの、

きえ

なん事

こそ

かなし

けれ。

(挿絵一〇)

「(一一オ)

「(一二ウ)

されば、りうじんもをよばぬ中をばさけられ
けるにや、かぜにハかに吹わけて、まつらが
ふねハにしをさしてふかれゆくとみえしか
ば、一のたにのおきにて、むこ山おろしに
はなされて、ゆきがたしらずたゞよひしが、
つるにふねをくツがへし、そのみくツと
なるとかや。そのうち、なみかぜしづまれバ、
みやすどころの御ふねハあハちのむしま
につかせたまひけり。此嶋と申ハ、つりする
あまの家ならでハすむ人もなき、ひまあ
らハなるあしの屋にうきふししげきすみ

「(一二オ)

かのうちへぞいれたてまつりける。此四五日
のなみかぜ、御心もよハリ、今ハはやたえいり
たまひぬ。これをみて、心もなきあまの子ど
もまでも、「こハいかにしたてまつらん」と、なげ
きかなしみて、御かほに水そゝきなどして、
やう／＼いき出させたまひける。「なにしに、うき
命そのまゝたえもせで、又うきめを見る事
よ」と、なげかせたまへども、かひぞなき。さら
でだに、なみだのかゝる御袖、かハくまもなき
おりからに、とまもるしづく、あらいその岩
にくだくるなみの露、うき月のうへをあら
そふふぜいなり。「いつまで、かくてあるべき。
とさのはたとやらんいふうらへ、をくりて
もあれかし」と、うちわびたまへバ、あまども
申けるやうハ、「かほどまで、うつくしくまし
ますじやうらうを、われらがふねにのせ
申、はる／＼とさまでおくりたてまつらん
に、いかなる津とまりにても、人のうバひ
とり申ことの候べきに、ゆめ／＼かなふまじ

き」

よし

を

申

けれ

ば、

「(一三ウ)

(挿絵一一)

「(一四才)

ちからをよばず、なみのたちゐに御袖をしぼりつゝ、ことしハこゝにぞをくらせたまふ、御心のうちこそ、あはれなれ。さても、いちのみやハ、かやうの御事を、夢にもしらせたまはれバ、みやすどころの御むかひに、たけぶんを京へのぼせられしが、月日はるかに成ぬれど、御さうをも申さねバ、「いかなるうきめにもあひぬるか」と、しづこゝろなくおぼしめして、みやこよりくだれるものに御たづねありければ、「みやすどころハ、こぞの九月にみやこを御たちましゝて、はたへくだらせたまひ候とぞ、たしかにうけたまはり候」と申せバ、「さてハ道にてうばゝれけるか。又、よをうらかぜにはなされで、ちいろのそこにもしづみぬるか」と、しづ心なくおもひわづらへせたまひけり。あるよ、御けいごに候ひけるふしども、ちうもんにとのゐして、よもやまのことをかたりける中に、あるものゝ申けるハ、「さてもこぞの九月、みやこをたつて當國へわたりしに、あハ(鳴門)のなるとをすぎて、たうごくのちをとをりしとき、ふなかぢにかゝりしきぬをとりてみしかバ、いつくしかりつるものよ。世の

「(一四ウ)

「(一五才)

つねの人のしやうぞくともみえず。これハ、いかさま、だいいり、るんの、御しよ上らう女バうのゐ中のかたへくだり給ふとて、なんふうにあひて、うみへしづませたまひたる、そのしやうぞくにてあるらん。あな、あはれや」などゝいひけるを、みや、かぎりなくふしぎにきこしめし、「こぞの九月のころならバ、もしそのゆくゑにてもやあるらん」と、御心もななくおぼしめし、「そのきぬ、いまだあらバ、もちてまいれ」とおほせければ、「色こそそんじて候へども、わたくしに」とて、とりよせまいらせける。みや、つくゝと御らんぜらるゝに、みやすどころの御むかひに、たけぶんをみやこへのぼせられしとき、ありいのしやうじがてうしん申せし御きぬなり。「ふしぎなり」とて、たちのこしたるきぬをめしだいし、さしあはせて御らんぜらるゝに、あやのもむすこしもたがはずつゞきたれば、なにのうたがひのあるべきなれば、みや、二めとも御らんぜず、此きぬを御かほにをしおほひ、なきしづませたまへバ、ありいも御前に候ひしが、なみだをゝさへてまかりたツ。みやすどころ、いまハゝや、此世にましますとハ露ほどもおぼしめされず、此きぬのかぢにかゝりし日を、なき人のきにちにさだめ

「(一五ウ)

「(一六才)

られ、御きやうあそバして、「くわこゆうれ
い、ふぢはらのうぢ女、ならびにはだのたけ
ぶん、ともにくかいをいで、すみやかに九
ほんのじやうせツに

いたり

たまへ」と、

いのらせ

たまふぞ

あはれ

なる。

「(一六ウ)

「(一七オ)

(挿絵一二)

「(一七ウ)

さるほどに、そのとしよりしよくくにいく
さおこツて、六はら、かまくら、九国、ほツこく
のてうてき、どうじにほろびしかバ、せんてい
はおきのくによりもくわんかう成たまひ、
一のみやハとさのはたよりもみやこに帰り
入たまふ。天下、ことくくげ一とうの御代
となり、めでたきとハ申せども、一のみやの
御かたにハ、みやすどころのおなじ世におハ
しまさぬことを、ふかくなげかせ給ひしに、
あハちのむしまに御さあるよしを、かぜの
たよりにきこしめし、御むかひをくだされて、
みやこにいらせたまふ。たゞわうしツが山よ

「(一八オ)

りも出て、七世のまごにあひ、はうしがほ
うらいに入て、やうきひをみたりしも、かく
やとおもひしられたり。みやす所ハ、「思はずも
心つくしにおもむきし、御あはれさのこゝ
ろうさ、なみにたゆたふうたかたの、きえぬ
身ながらふたとせすぎし物おもひ、御をし
ハかりも、なをあさや」と、御袖をしほり給へバ、
みやハ、とわたるふねのかちのはに、かくとも
つきぬ御なげき、わかれの中のかかれと、
あとゝひしとしの、かすゝつもりしかなし
み、たゞ身ひとりの物おもひ、わすれかね
にしありさまを、

かたり

つくさせ

たまひ

けり。

「(一八ウ)

「(一九オ)

(挿絵一三)

「(一九ウ)

かくて、うかりし世のときのまにひきかへて、
人げんのゑいぐわ、天じやうの五らく、きハ
めずといふ日もなし。つくさずといふ御ゆう
もなし。ちやうせいだんのうちにハ、りくハの
あめ、つちくれをやぶらず。ふらうもんの
まへにハ、やうりうのかぜ、ゑだをならさず。

けふを千とせのはじめとして、めでたき
ために、

あかしくらさせたまひけり。

「(二〇才)

(白紙)

「(二〇ウ)

「(裏見返し)

「(裏表紙)

付記 翻字に際しては、本学日本文化学部言語文化学科学生

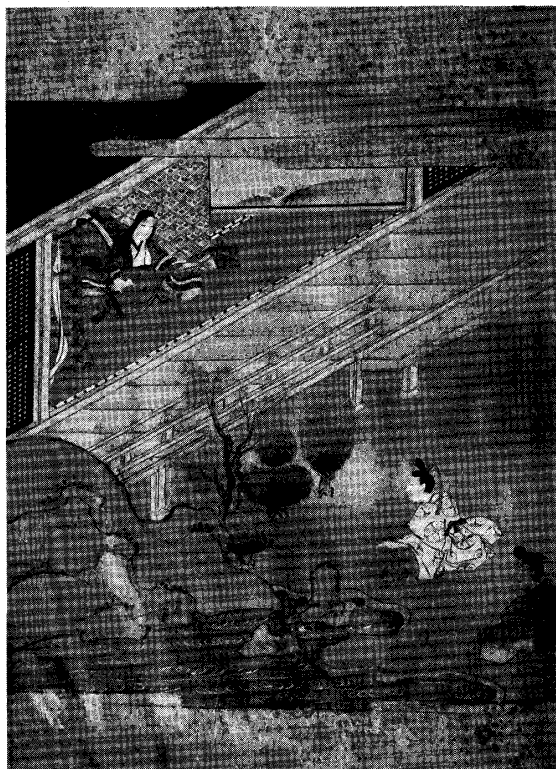
丹羽巧・福田進・山口和敏の三名の諸君の協力を得た。

参考文献

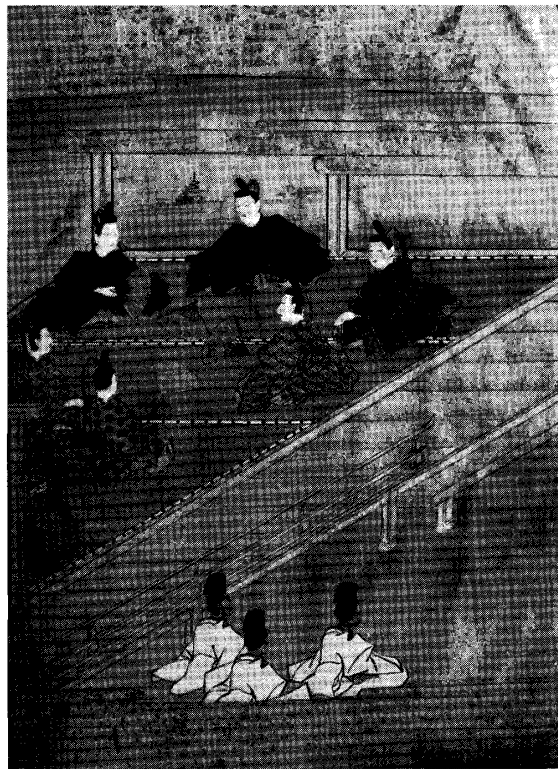
須田悦生・田中文雅・服部幸造・佐藤彰編『寛永版舞の本』(三弥井書店、一九九〇年五月)

麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系 舞の本』(岩波書店、一九九四年七月)

服部幸造「新曲」(福田晃・眞鍋昌弘編『幸若舞曲研究 第十卷』(三弥井書店、一九九八年二月)所収)



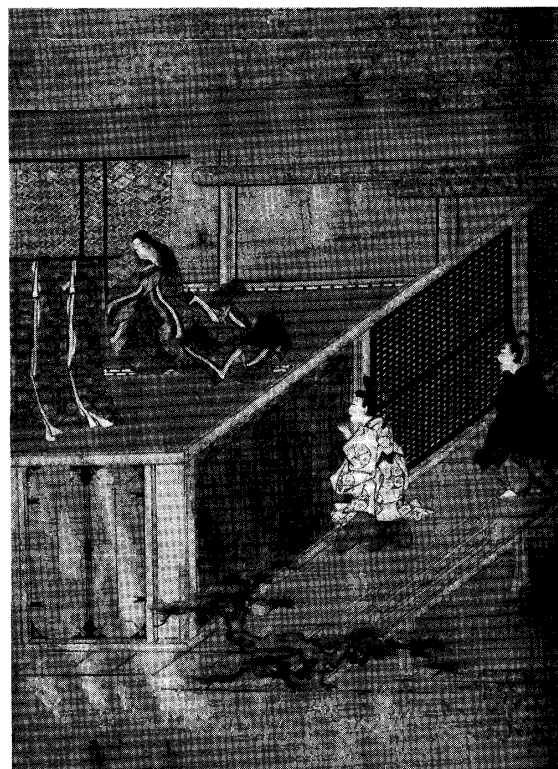
挿絵二（上八才）



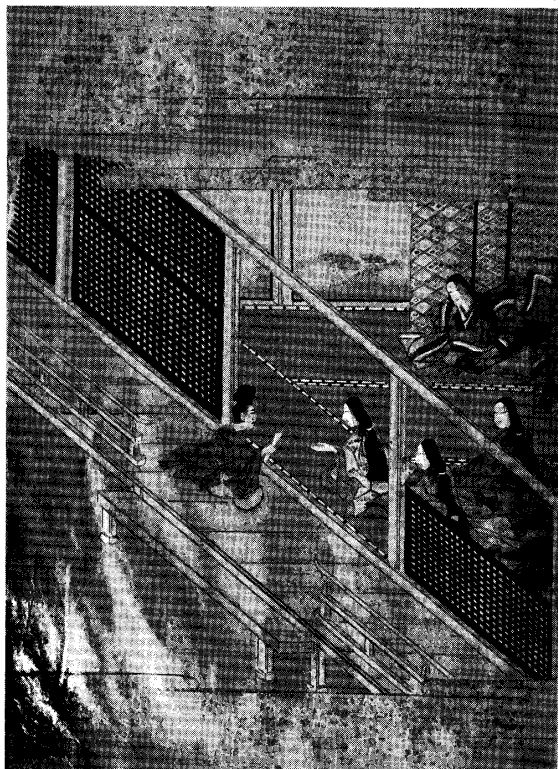
挿絵一（上三ウ）



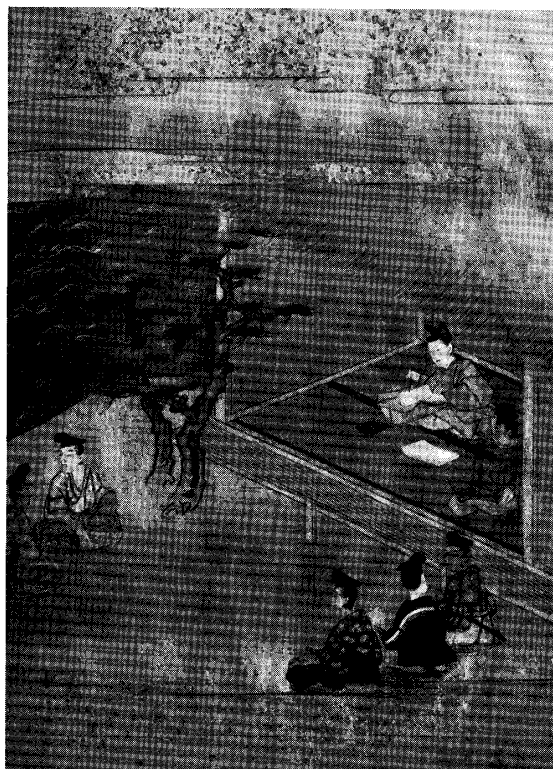
挿絵四（上一五才）



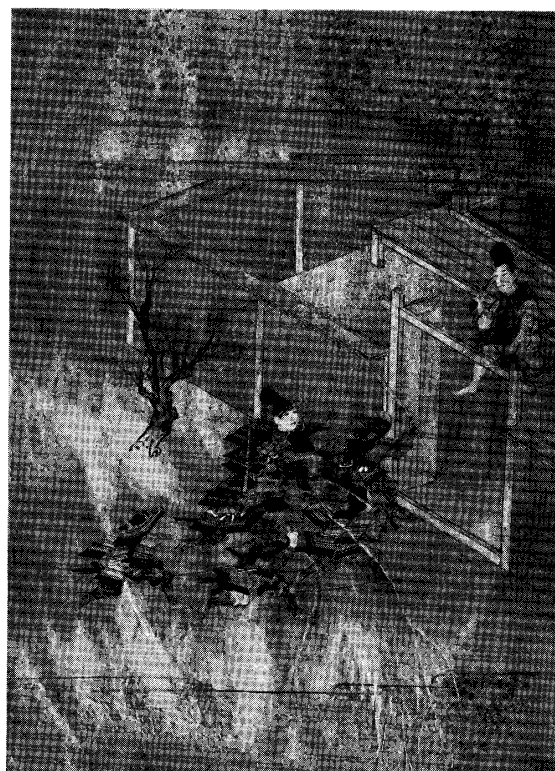
挿絵三（上一二才）



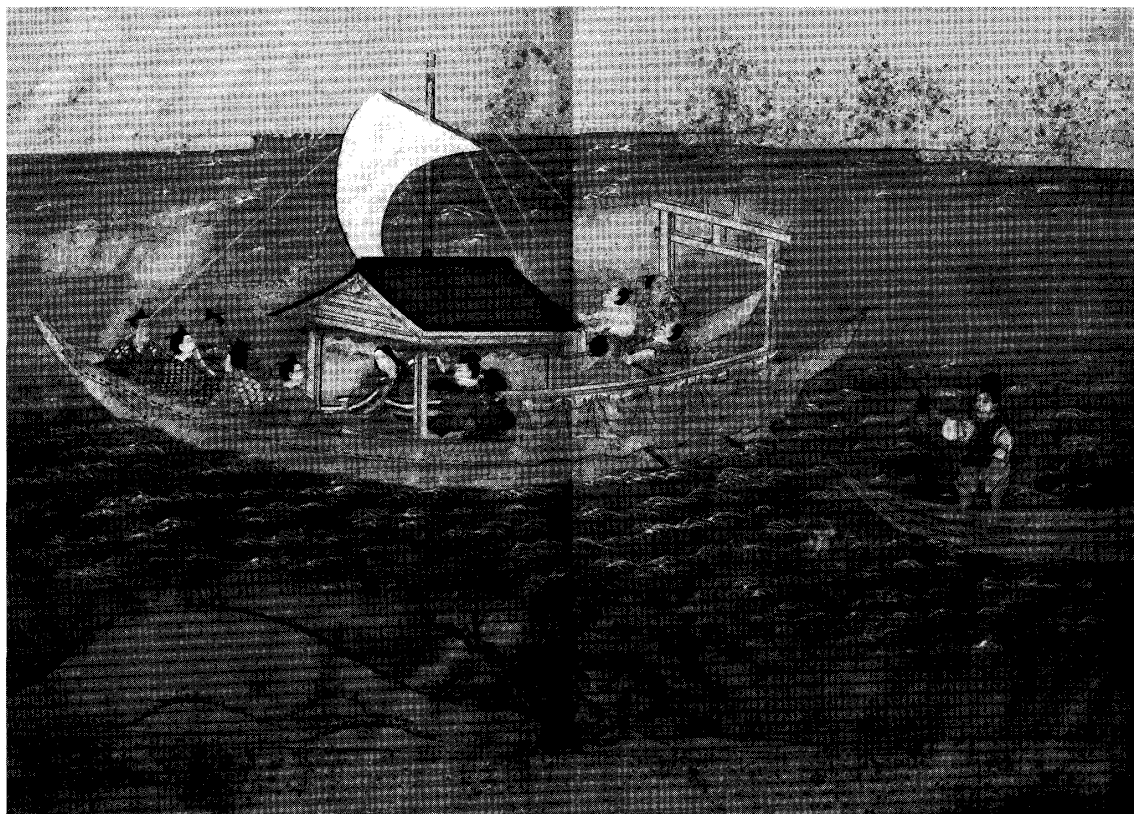
挿絵六（上二〇オ）



挿絵五（上一七ウ）



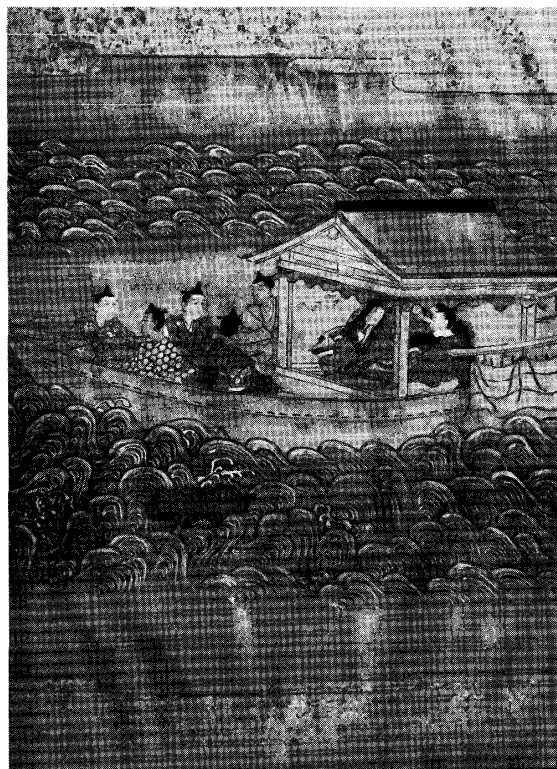
挿絵七（上二三オ）



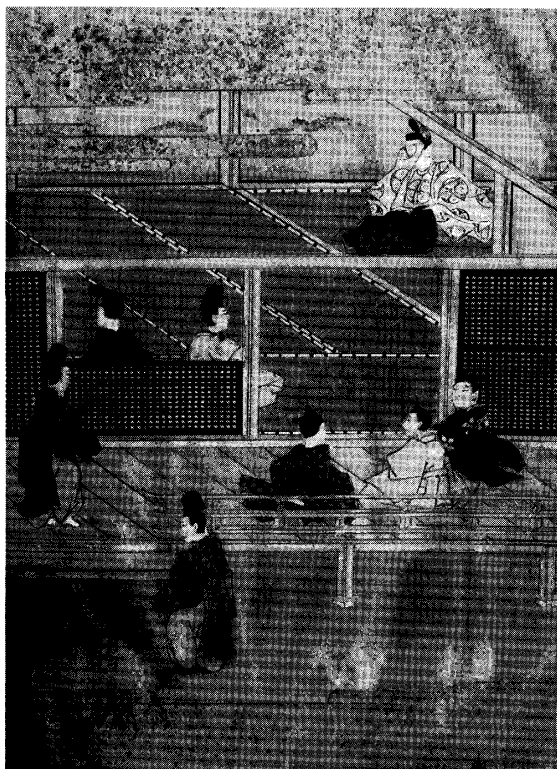
挿絵八 (下ニウ〜三オ)



挿絵一〇 (下ーウ)



挿絵九 (下六ウ)



挿絵一二（下一七ウ）



挿絵一一（下一四オ）



挿絵一三（下一九ウ）